

同志社大学

2014年度 個人研究費研究経過・成果報告書

2015年 3月 4日提出

所 属	職 名	氏 名
日本語・日本文化 教育センター	助教	佐藤 紀美子
研 究 題 目	ディベートの評価に関する考察	
研 究 成 果 の 概 要	<p>ディベートは、論理的思考能力や情報分析能力の向上のほか、言語能力養成にも役立つものとして、日本語教育の現場でも、特に上級以上の学習者を対象としたクラス活動に取り入れられている。しかし、限られた時間の中で上述の力を総合的に伸ばすためには、効果的なフィードバックを与える必要が不可欠であると思われる。これまで複数のフィードバックを行い、その効果について考察を進めてきたが、本年度は、日本語母語話者と日本語学習者が、ディベートの発話をどのように評価するのか、比較分析を行った。</p> <p>日本語母語話者6名、上級日本語学習者11名の評価を量的・質的に比較分析したところ、下記の特徴が明らかとなった。</p> <p>まず、ジャッジシートから同一の評価項目に対する日本語学習者と母語話者の評価を分析した結果、両者の評価には大きなずれはないが、日本語学習者のほうが「質問の意図の明確さ」を除くほぼ全ての項目において、やや厳しい評価をする傾向にあること、「説得力」に関しては、母語話者・学習者による差は見られず、個人差が大きいことが明らかとなった。</p> <p>次に、自由発話形式のコメントを対象とし、両者が学習者の発話の何をどのように評価しているのかについて分析した結果、両者ともに「内容」「話し方」「態度」の順で評価に重きを置いているという共通点が見られたが、その内容を質的に分析すると、日本語学習者の評価が抽象的で漠然とした印象評価であるのに対し、日本語母語話者の評価には、実際の発話に即してどの部分がどのような点でどう評価されたのかという具体性があり、ディベートの目的の一つである「説得力のある発話」「わかりやすさ」につなげるためにどのような話し方が必要なのかという点についての言及が見られた。</p> <p>今回対象とした評価・コメントから、上級学習者がジャッジを行う際に問題となるのは、実際の発話を基にして改善すべき点などを具体的に述べる力、「説得力」「論理性」に関して、自らが何を判断材料としてそのような評価に至ったのかを述べる力であると言える。ディベートはディベーターが、相手やジャッジを説得するゲームであるが、ジャッジも判定とその根拠を述べる際に、ディベーターを納得させる必要がある。口頭能力の向上を目指してディベートを教室活動に取入れる際には、説得力や論理性がどのような要素によって構成されているのか、それを効果的に示すためにはどのような表現の使用が有効かについて、学習者に十分理解・意識をさせようとして試合に臨ませることが重要であると考えられる。</p> <p>この成果をまとめた論文「ディベートの発話に対する日本語母語話者と日本語学習者の評価に関する一考察」は、『同志社大学 日本語・日本文化研究』13号に掲載予定である。</p>	